



2016.12  
vol.203



## 「ひと」となる。 学校長 飯山 等

ゴリラやチンパンジーが「ヒト」であると、驚きと共に知ったのは何時のことだろう。以来、河合雅雄、松沢哲郎、山際寿一等の優れた研究者の書き物によって、「ヒト」であること、そして「ひと」であることの由来と意味を教えられ、考えさせられてきた。その知見によれば、チンパンジーとサルがよく似ているように見えるが、実際には人間とチンパンジーがよく似ていて、サルが違う生き物なのである。およそ3千万年前、共通祖先から分かれてサルはサルになった。その時点で、人間とチンパンジーは同じひとつの生き物である。その生き物が、およそ5百万年前、人間とチンパンジーは分岐した。

サルとヒトの際だった違いはコミュニケーションにあるという。群れで暮らすサルの社会では、相手をじっと見つめるのは威嚇になり、優位なサルの特権である。劣位なサルは見つめられたら、視線を避け、歯をむき出して笑ったような表情をして、歯向かう気がないことを知らせる。サルは常に自分と相手のどちらが強いか弱いかを認知して、苛烈な争いに陥って個体が深く傷つき、社会が崩壊する危機を避けている。

一方ゴリラの社会では、相手を見つめることは威嚇でなく、遊びや交尾の誘い、挨拶や仲直りの提案である。体が大きく強い者が何かを食べているとき、メスや子どもがそれをじっとのぞきこむ。すると、オ

スはそのかけらを落として、メスや子どもが食物を取ることを許容する。だからこそ、サルには決してない、向かい合って食事をする事ができる。ヒトであることの大きな特徴である。

21世紀を生きるわれわれはゲノムという遺伝情報で生物を見るようになった最初の世代である。そのゲノムの視点から見ると、人間とサルのあいだには約6.5%の違い、人間とチンパンジーには約1.2%の違いがある。時間的にもゲノム的にもサルとヒトは遠く隔たっている。因みにシマウマとウマのゲノムの異なりは1.5%で、シマウマとウマとの違いよりも、チンパンジーと「ひと」の違いの方が少ない。

しかもその1.2%は、何か加わった1.2%ではなく、チンパンジーが持っていたものを失った。何かプラスされてひとになったのではなく、ゴリラやチンパンジーの持っていた能力を失った。失ったからこそ、ひとになった。その喪失によって芽生え、ヒトを「ひと」にしたもの、それは「想像するちから」であると松沢哲郎氏は言う。

「チンパンジーは、今、この世界に生きている。人間のように、百年先のことや、百年昔のことに思いを馳せたり、地球の裏側の人に心を寄せるといったことは決してない。チンパンジーは絶望しない。自分はどうなってしまうんだろうとは考えない。それに対して人間は容易に絶望してしまう。でも、絶望するのと同じ能力、その未来を想像するという能力があるから、人間は希望をもてる。どんな過酷な状況のなかでも、希望をもてる。人間とは何か。それは想像するちから」と。